

副詞「もう」が呼び起こす情意性 — 中国語話者の「もう」の使用に於ける母語干渉 —

吉田 妙子

要 旨

日本語の「もう」も中国語の「已經」も時間関係副詞であるが、両者の指示範囲が微妙にずれているため、中国語話者は時折不適切な場面で「もう」を使ってしまう。「もう」は純粋な事件完了報告文を示す場合はルーティンな事件の完了のみに用いられるが、話者間の事件時間認知のずれを調整するために用いられることも多い。非ルーティンな事件の完了文に於いては、聞き手の認識を改めさせるための「仄めかし」の情意が込められている場合も多い。これに対し、「已經」は予定性のあるすべての事件の完了を表すために用いることができるので、中国語話者は非ルーティンな事件の完了にまで「もう」を使ってしまいやすい。余分に使われた「もう」は、本来予定されていなかった事件があたかも予定されていたかのような奇異な印象を与えると共に、聞き手に「認識の遅れを非難されている」という不適切な情意を呼び起こしてしまうのである。

【キーワード】 事件時間、参照時間、事件の予定性、ルーティンな事件、事件完了報告文

1. はじめに

学生の誤用の中には、文法上誤っているわけではないが、何となく不自然で聞き手に奇異な感じをを起こさせる、という種類のものがある。

(1) 先生、私はもう大学院の試験に合格しました。

これは毎年聞かされる報告であるが、聞くたびに何故か「何を生意気な！」と感じてしまう。或いは、何か責められているような、情けない気持ちになってしまう。

(2) 先生、私たちはもう金門街に着きました。

これは、学生が私の家に遊びに来た時の電話である。金門街のバス停に着いて電話したら私が迎えに行くことになっていたのだが、電話を受けた私は何だかせかされているような気がし、「彼らをだいぶ待たせてしまったのだろうか。」と焦った。

(3) 私の母は、もう亡くなりました。

これは長く癌を患っていた母親を亡くした学生からの訃報であるが、これを読んだ私は「この親不孝者！」とどなりたくなかった。

日本語の「もう」は、何故上記のようなさまざまな情意を呼び起こすのであろうか。これらの「もう」は、どれも中国語の「已經」(yi-jing)の直訳である。

(10) 老師，我已經考上了研究所。

(20) 老師，我們已經到金門街了。

(30) 我母親已經過世了。

即ち、(1)~(3)の誤用の根源は母語干渉にあると思われる。(10)~(30)の「已經」は、何故「もう」と対応しないのであろうか。中国語の「已經」は、情意性を持っていないのであろうか。或いは、「已經」も情意性を持っているが、「もう」の情意性とかみあっていないのであろうか。

本稿では「もう」と「已經」の用法を比較対照し、両者の指示領域のずれによってどのように不自然な「もう」の使用が生じるか、それがいかにして不適切な情意を呼び起こすか、を中心に考察を進める⁽¹⁾。

2. 「もう」と「已經」の基本的性質

2-1 テンス・アスペクトとの関わり

- (4) もう寝た (動作完了) / まだ寝ていない (動作未完了)
- (5) もう寝る (動作開始の意志) / まだ寝ない (状態継続の意志)
- (6) もう寝ない (動作中止の意志) / まだ寝る (動作継続の意志)
- (7) もう寝ている (動作開始完了) / まだ寝ていない (動作未開始状態)
- (8) もう寝ていない (動作の中止・継続状態) / まだ寝ている (動作継続状態)

「まだ」が修飾するのは、動作の未完了ないしは継続であり、総じて非動作性・状態性の述語である。それ故、動作の完了を示すタ形と「まだ」は原則として共起することがなく、「まだ寝た」という言い方は原則的に成立し得ない。(6)~(8)の動詞をタ形にした文は、完了でなく過去を表す文になる。) これに対して「もう」は、状態性の述語とともに事態の完了・開始・中止など、ある事態から別の事態への変化を示す動作性の述語をも修飾する。

しかし、中国語の「已經」「還 (hai)」の場合は少し事情が違う。劉・潘・故 (1988) によれば、「已經」は変化を示すアスペクト助詞「了 (le)」を伴って「已經~了」という形で使われ、「事件が起こってある程度時間が経ってから発話され、事件の結果や状態が発話時に至るまで続いていること」を示す。

- (40) 已經睡了 / 還沒睡
- (50) 我要去睡了 / 我還不想睡
- (60) 不要再睡 / 還要睡
- (70) 已經睡了 / 還沒睡
- (80) 不睡了 / 還在睡

「還」が「まだ」とほぼ対応しているのに対して、「已經」の方は、(50) (60)のような意志 (或いは未来の事件) を示す文、(80)のような継続状態を示す文には使えない。即ち、「もう」は動作の完了も状態も修飾することができるが、「已經」は動作の完了しか修飾することができないのである。

2-2 時間関係副詞としての「もう」と「已經」

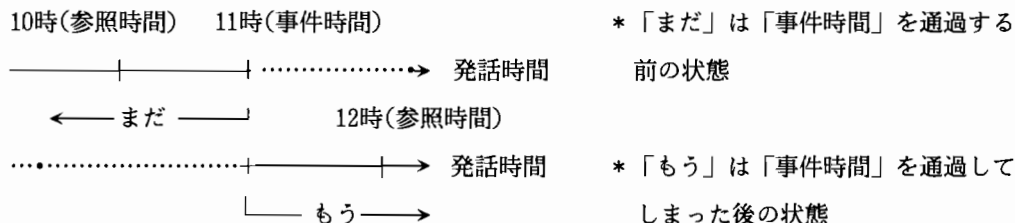
時間副詞には「某日」など特定の時間を指定する、いわば「絶対時間副詞」とでも呼ぶべき種類以外に、相対的な時間を示す「時間関係副詞」がある。この時間関係副詞は、文が発話された「発話時間」(utterance time)、事件が発生する「事件時間」(event time)、さらに事件時間を相対化し位置づける「参照時間」(reference time)を持つ。日本語の

「もう」「まだ」、中国語の「已經」「還」も、この時間関係副詞に属するのである⁽²⁾。

(9) 私が帰った時、妻はもう寝ていた／まだ寝ていなかった。

(9C) 我回家的時候，我的老婆已經睡著了／還沒睡覺。

この文は、妻が実際に寝始めた時間（事件時間）に関して「何時何分」という絶対時間の情報を与えているのではなく、「私が帰った時間（参照時間）より前に／より後に」という相対時間の情報を与えているのである。例えば、妻の寝た時間が11時（事件時間）だとすると、私が10時に帰ってきた場合は「妻はまだ寝ていなかった」と言い、12時に帰ってきた場合は「妻はもう寝ていた」と言うことになる（下図）。



このように、ある時点を過ぎると事件時間は車窓の景色の如く参照時間の前方から後方へと動く。それに対応して参照時間は事件時間の後方から前方へと動き⁽³⁾、「まだ」状態から「もう」状態へと移行する。「もう」も「已經」も、このような参照時間を持っている。

2-3 事件時間のバリエーション — メタファー的用法

「もう」「まだ」も「已經」「還」も、本来は事件時間を過ぎたか過ぎないかという意識を示している。しかし、日本語の「もう」と「まだ」はこのような時間領域にとどまらず、時間性を捨象したメタファー的な用法もなされる。

(10) だいぶ使ってしまった、もう1つしかない。／まだ1つある。

(11) もう10人来た。／まだ10人しか来ていない。

などは、時間領域から数量領域への移行と考えられる。いずれも時間と共起する数量の減少方向（例(10)）、或いは増加方向（例(11)）に於ける限界の数量を越えた時点が、事件時間として意識されている。また、

(12) たくさん食べたから、もう食べたくない。／まだ食べたい。

などは、限界時間（事件時間）を越したことの表明であると共に、「もうこれ以上食べたくない」という、限界数量を越えたことの表明でもある。

(13) あともう10人来た。

(14) もうちょっとで成功するところだったのに。

(15) 背がもう5センチ高かったらいいのに。

などは、数量詞と共起することによって累加を示す用法で、純然たる数量領域でのメタファーである。（この用法の「もう」は、アクセントが平板型になる。）

さらに、次の例は程度領域に於けるメタファーと考えられる。

(16) あんな学校に行くくらいなら、浪人した方がまだいい。

これは「浪人すること」を好ましくない事件の「参照事件」とし、「あんな学校に行くこと」を実現すべからざる「最悪の事件」と捉え、「浪人すること」は「最悪のレベル」に達していない、と言っているのである。この程度領域の「まだ」に対応する「もう」の用法は、次の例であると考えられる⁽⁴⁾。

(17) 3時だ。彼はもう来るだろう。

(18) 10時だ。店を閉めよう。客はもう来ないだろう。

これらは近い未来の予測であるが、ある事件（「彼」「客」が来る、或いは来ない）が発生すべき可能性の限界を越えた、という言明である。さらに、

(19) 大学に合格したんで、もう、うれしくて、うれしくて。

(20) あなたって人は、ほんとにもうしょうがない！

などは間投詞に近い用法だが、「限度（事件時間）を越えたことに対する感慨・驚き」といった感情を表すものである。この例から、程度領域に於ける「もう」が情意副詞へと容易に転じ得ることが見られるであろう。

これらに対応する中国語の表現はどうだろうか。

(10C) 已經多半被用光了。現在只剩一個而已。／現在還有一個。

(11C) 已經来了十個人。／現在才来十個人。

(12C) 已經吃了很多。我吃不下。／還想吃。

(13C) 又来了十個人。

(14C) 差一點就成功了。

(15C) 再長高五公吋就好了。

(16C) 去上那樣的學校的話，重考還比較好。

(17C) 已經三點了。他應該快來吧。

(18C) 已經十點了。打烊吧！客人不會再上門來了。

(19C) 我考上了大學，非常非常地高興。

(20C) 真是受不了你！

「已經」は、動作の完了または時間と共に変化する数量詞以外につけることはできない。それ故、時間領域以外で「もう」と「已經」が対応しているのは(11C)だけである。(10C) (12C) (17C) (18C) では、「已經」は数量や可能性を直接修飾することはできず、数量や可能性の前提となる事件を修飾することしかできない。(13C) (14C) (15C) の累加の用法の「もう」には「又」「差一點」「再」などの個別の副詞が当てられ、(19C) (20C) の情意を示す「もう」に至っては、「非常非常地」「真」などの程度副詞が加えられているのみである。

日本語の「もう」は完了以外の時制をも示し得る故に、時間関係を捨象した別領域でのメタファー的用法が可能であり、そのために情意副詞としての用法も出て来得る。しかし、中国語の「已經」は完了時制しか示さない故にメタファー的用法が成立せず、情意副詞としての用法に至っては皆無である。

3. 事件の予定性

「もう」のつく完了は、「もう」のつかない完了とどう違うのだろうか。言い換えれば、

参照時間を持つ事件「もうご飯を食べました」は、参照時間を持たない事件「ご飯を食べました」とどう違うのだろうか。

石神(1978)、赤羽根(1991)は、「まだAだ」という発話がなされる際には「近々Aが終了するだろう」という「前提文」が話者の意識の中にある、と言う⁽⁵⁾。即ち、そこには「起こるべき事件の未完了」の意識が見出される。例えば「12時に昼食を取る」という「前提文」があるなら、

(20) 私は、まだ昼ご飯を食べません。11時になったばかりですから。
などと、「まだ」を用いて発話するが、そのような前提文がない場合には、

(21') 私は、昼ご飯を食べません。ダイエットしていますから。
などと、「まだ」を用いないで発話するのである。

「まだ」を用いる時には、事件時間に於いて発生する事件が前方(未来)に予定されている。つまり、その事件は「予定されている事件」「起こるべくして起こる事件」である。そして、時間の流れに従って事件時間が後方に移り行く(2-2)ことを考えれば、「もう」の示す過去の事件とは「予定されていた事件」「起こるべくして起こった事件」だということになる。反対に「もう」のつかない完了時制の表す事件は、「予定性」が問題にならない偶発的な事件である。例えば、突然停電した時、我々は電力会社に電話をかけて、

(22) こちら〇〇地区ですけど、もう電気が消えちゃったんですが。(×)
などと言ったりはしない。しかし、予め電力会社から予告されていた停電ならば、

(22') 停電は10時からのはずなのに、もう電気が消えちゃったんですが。
などと、「もう」を使って文句を言うことが可能になるのである。

この事情は「已經」に関しても同様である。突然の停電に困って電力会社に電話する時、
(22C) 這裡是〇〇地區，我們已經沒電了。(×)

と言うことはできず、「我們現在沒電(可以用)。」と言わなければ変である。しかし、懐中電灯などの電池が切れていてつかない時は、「已經」を用いて、

(22C') 媽，電池已經沒電了。(お母さん、もう電池がないわ)
などと言うことができる。電気は通常なくなることが予定されているものではないが、一定の量が決まっている電池は、一定期間使えば電気が必ずなくなるものだからである。

4. 「もう」と情意性

4-1 「事件完了報告文」に於ける「もう」

「もう」の使用は場面性に左右されるところが大きいが、ここではあらゆる場面性を捨象した文を「事件完了報告文」と呼ぶことにする⁽⁶⁾。事件完了報告文に於いて、「もう」は予定性のない事件に用いられると不自然になる。しかし、かと言って予定性のある事件すべてに「もう」がつけられるわけではない。

(2) 先生、私たちはもう金門街に着きました。(×)

(3) 私の母は、もう亡くなりました。(×)

予定性を持つ事件とは、「もう春だ」「もうご飯を食べた」など自然や社会慣習上で規則性を以て発生する事件と、「もうあのことを彼に話した」などのように全く個別的・偶発的に発生する事件がある。「學生が金門街に着く」ことは某日の予定にはあり得ることだ

ろうが、あくまで個別の事件である。「母親の死」というのは、いつかは起こり得ることではあるが、日常ルーティンに発生することではない。「もう」で修飾することができるのは、

23 母は、もう寝ました。

のように、規則的な反復性を以て発生するルーティンな事件のみなのである。

以上のような「事件完了報告文」は、発話時間と参照時間が重なっている文である。

では、発話時間が参照時間からずれている文はどうであろうか。

(22^a) 私が家に着いた時は、もう電気は消えていました。(○)

(2^b) 私が家に着いた時は、もう彼らは金門街に着いていました。(○)

(3) 私が家に着いた時は、もう母は亡くなっていました。(○)

これらは参照時間が過去にずれて発話時間から引き離されたため、事件のスコープが広がり、発話時間と参照時間の区別が明らかになったので、「もう」が自然になったのである。

(1) 先生、私はもう大学院の試験に合格しました。

という文を聞いて奇異に感じられたのは、ある学生がある試験に合格することは教師にとって日常的な周期性を持つ事件ではないからである。しかし、定期的に行われ、人によって合格の時期が異なる国家試験の類いを考えれば、日常ルーティンな周期性とは違ったスケールの周期性が想定される。そこで、

(1^a) 私はもう司法試験に合格したけれど、彼はまだだ。

などと、「もう」を用いた発話が可能になってくる。

「事件完了報告文」の中では、「もう」はさまざまなスケールに於けるルーティンな予定性を持つ事件のみを修飾する。

4-2 情意副詞としての「もう」

では、語用論的に見た場合、「もう」はどんな場面で発話されやすいだろうか。

24 「ご飯、食べた?」「うん、もう食べた。」「じゃ、行こうか。」

などの会話に於ける「もう」は、多くの場合、相手に食事の心配をさせない意図で発話されるのではないだろうか。「もう」には相手の認識に働きかける作用があるようだ。

冒頭の母親の訃報を伝える手紙（これは「事件完了報告文」にあたる）、

(3) 私の母は、もう亡くなりました。

が変なのは、「もう」の本来表す事件の予定性により、まるで親が死ぬのを予定し期待していたかのような印象を与えるからである。しかし、ある特定の状況下では、この文の「もう」はある機能を果たす。

(3^a) A「お母様は、今年おいくつになりましたっけ。」

B「え? 母はもう亡くなりましたが。(○)」

この種の「もう」は、専ら「二者間の事件時間についての認知のずれを調整する」ために用いられている。

Bの認知に於いては、「Bの母親の死」は過去の事件として存在している。これに対し、Aの認知に於いては「Bの母親の死」という事件は存在していない。

BはAの認知を修正しなくてはならない。それには、Aの認知中に事件をインプットす

る必要がある。発話時間以前に起こった一回限りの事件を表すのは過去形であるから、Bは単なる過去形を用いて、「母は亡くなりましたが。」と言うこともできる。だが、Aは「Bの母親が現在生きている」という前提を持っているので、このAの前提を崩すためには「Bの母親の死」という事件を現在から照射した方が有効である。そのためには、発話時間を参照時間と位置づけ直す必要がある。そこで、「もう」が使われることになる。

このように修正されて、「母はもう亡くなりましたが。」という発話が可能になる。この時点では発話時間は同時に参照時間になるため、「もう」は「事件はあなたが考えている時よりも以前に完了していたんですよ。」という含みを持ち、ともすると相手の認識の遅れを非難する情意を帯びてくるのである。

この時間認知のずれの修正は、むろん聞き手の時間認知だけでなく、

㉞ ついさっき出発したと思ったのに、もう着いたのか。⁽⁷⁾

など、話者自身の時間認知のずれを調整するために用いられることもある。

このように、発話時間と参照時間の重なる「もう」は、聞き手または話し手の事件時間認知の遅れを指摘し、そこから皮肉・驚きなどを含意させたり、相手の行動を促したり制止したりする暗示の用法へと容易に転じ得る。それ故、ルーティンでない事件に敢えて「もう」が付されて「先生、私はもう合格しました。」と言われれば、「だから、もう授業に出たくない。」などの仄めかしを嗅ぎ取り、「私たちはもう金門街に着きました。」と来れば、「迎えに来るのが遅い。」という非難を我々は感じ取ってしまいやすいのである。

5. 「已經」と情意性

5-1 予定性のスケール

「已經」は、事件発生後時間が経ってから発話される。従って、バスの中から目的地が見えた時に発するのは「到了(着いた)。」であり、目的地に着いてから到着の報告をする時に発するのは「已經到了。」である。

しかし、いくら発生後時間が経った事件でも、予定性のない事件に用いられれば、「もう」と同様不自然になるのであった(3, (200))。但し、「もう」と同様、このような予定性のない事件でも、スコープを広げて参照時間を発話時間から引き離せば、やはり「已經」を用いることができる。

(200) 我到家的時候，已經沒電了。(○)

ところが「已經」の指示する事件の場合、その予定性のスケールが「もう」とは異なっている。到着を報告する「事件完了報告文」では、中国人は必ず、

(2) 先生，我們是もう金門街に着きました。

のように言うし、学生に何か頼み事をする時、急がせたわけではないのに、

㉞ 先生に頼まれた本、もう買いました。

というような報告が来る。しかし、これらは中国語では、

(20) 老師，我們已經到金門街了。

(200) 老師，你託我買的書已經買了。

と、「已經」を用いるのが自然である。

「もう」の示す予定性とは、周期性を持って繰り返し発生する事件についての予定性で

あった。「学生がバス停に着く」「学生が本を買ってきてくれる」といったことは教師にとって周期的に生じる事件ではない故、(2) ㉔ は「事件完了報告文」としては何かおかしいのであった。これに対して「已經」は、必ずしも周期性を持たない一回限りの約束事であっても、とにかく予定された事件が完了されれば用いることができる。つまり、「已經」の方が「もう」よりも、扱える事件の範囲が広いのである。これは、「已經」のどのような性質によるものであろうか。

5-2 「已經」による強調表現

語用論的に見て、「已經」が好んで使われるのはどのような場合だろうか。

「已經」も時間関係副詞である以上、参照時間を持つのであるから、当然「話者間の事件認知のずれの調整」の用法もある。

(30) A「你母親今年幾歲呢？」

B「哎？ 我母親已經過世了。」

しかし、この「ずれの調整」は中国語の場合、次のようにも用いられる。

(10) A「研究所的考試怎麼樣？（大学院の試験、どうだった？）」

B「我已經考上了。（合格したよ。）」

この場合では、「已經」は「相手がまだ知らないことを教える」という使い方がされている。そしてこの用法では、「事件完了報告文」では扱われることのできない、周期性を持たない事件を扱うこともできる。

また、次のような用法もある。学生がある科目の試験にパスしたかどうか、教務課に問い合わせに行くとする。教務課の職員は成績表を見てから、

㉔ 合格してますよ。／落ちてますよ。

などと言う。この時、中国語では、次のように言う。

(20) 你已經過了。／你已經被當了。

上の例はすべて、「発生してしまった事件が厳然たる事実で、すでに変更不可能であること」を強調するために「已經」が用いられている。

次の例はこの用法の根拠をさらに証左するものとなろう。

㉔ 先生に頼まれた本、もう買いました。

この中国語訳は (26C) のように「已經」を使うほか、次のようにも言う。

(26C) 老師，你託我買的书買好了。

劉・潘・故 (1991) によれば、「好」は「動作が完了し、かつ満足すべき状態に達したこと」を示す結果補語として用いられる。それ故、一定の過程を含み、かつ結果のでき具合が問題になるような種類の動詞を修飾する「已經」は、「好」と同義と考えてよい。一般に、何かがつかり完成したことを報告する場合は、「電視已經修理了（テレビの修理ができた）」「照片已經洗了（フィルムの現像ができた）」など、「已經」が好んで用いられる。

このように、事件の完了がゆるぎなく確かなことであることを明示することによって、結果の変更不可能性や、行為がつかり終わってやり残しのない状態であることを表明できるのは、ひとえに「已經」の効用なのである。

事件完了の決定性を宣告するこの用法は、事件経過に対する感慨を表明する方途ともな

る。試験の準備に非常に苦勞した学生がようやく合格した場合、

(10) 我已經考上了。(ついに合格したよ。)

と友人に報告することがあるが、これは「事件の完了状態を強調することによって感慨を深める」ためだと言う。むろん、マイナス感慨もある。長いこと看病していた母親が亡くなった場合には、「已經」を用いて複雑な感慨を表すわけである。

(30) 我母親已經過世了。(母がとうとう亡くなりました。)

6. 終わりに

「もう」が純粹な事件完了報告文の中で用いられるのは、ルーティンな事件の場合に限られる。しかし、発話時間と参照時間が重なっている場合は、事件完了報告の裏に話者間の事件時間認知のずれを修正するための暗示が込められることが多い。非ルーティンな事件について「もう」が積極的に使われる場合にはこの暗示性はいっそう決定的となり、聞き手の認識や行為を改めさせる「仄めかし」のために用いられると言ってよい。こうなると、「もう」はほとんど情意副詞と言って差支えないと思われるが、これはひとえに「もう」が参照時間を持つことから派生した性質である。

これに対し、「已經」は事件がルーティンか否かに関わらず、予定された事件の完了を示す。「已經」が情意的に用いられるのは、完了を強調することによって事件の回復不可能性を表したい場合である。「已經」のこのような用法は、中国語の統語構造に起因するところも大きいと思われる。事件が完了しその結果が発話時点まで持続している状態を発話時点から眺める、というアスペクトは、日本語では「合格している」「修理ができている」などとテイルが用いられる。しかし、中国語ではそのような複雑なアスペクトを表す助詞がない。そこで、副詞にその役割が課されてくる場合も出てくるのではなからうか。

「もう」は指示する事件の範囲が狭いが、時間領域から発展したメタファー的用法も多い。「已經」は指示する事件の範囲が広いが、用法はあくまで時間領域を離れることがなく、完了の標識として用いられるのが基本である。

その結果表出された情意は、「もう」による情意表出が他者志向的な傾向を持つのに対し、「已經」のそれは多分に内言的であると言えよう。

かくして中国語話者は、本来「もう」の指示し得ない事件にまで「もう」を用いてしまい、その結果、彼ら自身の意図しなかった聞き手の反感・罪悪感・焦燥感・不謹慎感などのさまざまな情意を呼び起こしてしまうのである。

注

- (1) この論文は、「台湾日本語文学報12」(1997, 中華民国日本語文学会)掲載論文『「先生、私はもう合格しました」—中国人学生による不適切な「もう」の分析—』を、新規に日中語対照研究として発展させたものである。台湾人30人へのアンケート調査を行い新たに分析を加え、上記論文とは異なる結論を得た。
- (2) 陸・馬(1985)は「時間関係副詞」を「不定時時間副詞」、「絶対時間副詞」を「定時時間副詞」と呼んでいる。
- (3) 森田(1988)の「主観的な基準点」という説明は、やや明確を欠くと思われる。基準点が主

観的なだけでなく、参照時間の相違があるだけであろう。

- (4) この「まだ」を、森田（1988）は「基準点からの遠近を比較する用法」としているが、やはりメタフェリックなレベルでの事件の未完了の意識を示していると考えられる。
- (5) 赤羽根（1991）の「前提文」は、前方の「事件」に相当するであろう。
- (6) 例えば、業務日誌などに書かれるような文を想定されたい。
- (7) 自分の時間認知の遅れを表明するこのような驚きを表現するには、中国語では「早就（zao-jiu）」（早くも）という副詞が好んで用いられる。

参考文献

- (1) 赤羽根義章（1991）『時間的な様態と認定を表す副詞類』「宇大國語論究2」
- (2) 石神照雄（1978）『時間に関する<程度副詞>「マダ」と「モウ」—<副成分>設定の一試論—』「国語学研究18号」
- (3) _____（1983）『副詞の原理』渡辺実編「副用語の研究」明治書院
- (4) 工藤浩（1983）『程度副詞をめぐって』渡辺実編「副用語の研究」明治書院
- (5) 寺村秀夫（1983）『時間的限定の意味と文法的機能』渡辺実編「副用語の研究」明治書院
- (6) 鄧久貴・鄭宏・王樹平・張黎明編（1992）「日語副詞分類詞典」笛藤出版
- (7) 藤堂明保・相原茂（1989）「中国語概論」大修館書店
- (8) 宮島達夫（1983）『情態副詞と陳述』渡辺実編「副用語の研究」明治書院
- (9) 森田良行（1988）「基礎日本語1」角川書店
- (10) 陆俭明・马真（1985）「現代漢語虚詞散論」北京大学出版社
- (11) 刘月华・潘文娛・故粹（1988）「現代中国語文法総覧（上）」相原茂監訳 ころしお出版
- (12) _____（1991）「現代中国語文法総覧（下）」相原茂監訳 ころしお出版
（中華民国国立政治大学日文学科助教授）